

平成 22 年 3 月 18 日

1. 分科会「広域連携」 考えられる論点（案）

○静岡で検討されている「支援センター」の配置、機能のあり方

○国との連携のあり方

- ・国の政府本部（緊急災害対策本部）との連携
- ・国の現地対策本部（緊急災害現地対策本部）との連携 等

○全国単位・ブロック単位での連携のあり方

- ・全国単位での情報共有・連携のあり方
- ・複数の都道府県単位（ブロック）での情報共有・連携のあり方 等

○被災した都道府県・市町村との連携のあり方

- ・被災した都道府県災害対策本部との連携
- ・被災した都道府県内の出張所・支局との連携
- ・被災した都道府県単位の災害ボランティアセンターとの連携
- ・被災した市町村災害対策本部との連携
- ・被災した市町村単位の災害ボランティアセンターとの連携 等

○その他

- ・東京等の県外団体のネットワーク（情報プラットフォーム）との情報共有のあり方
- ・都道府県ボランティア本部、都道府県災害対策本部及び国の現地対策本部の情報共有のあり方
- ・専門分野別ネットワーク組織との連携のあり方
- ・現地への先遣隊派遣のあり方 等

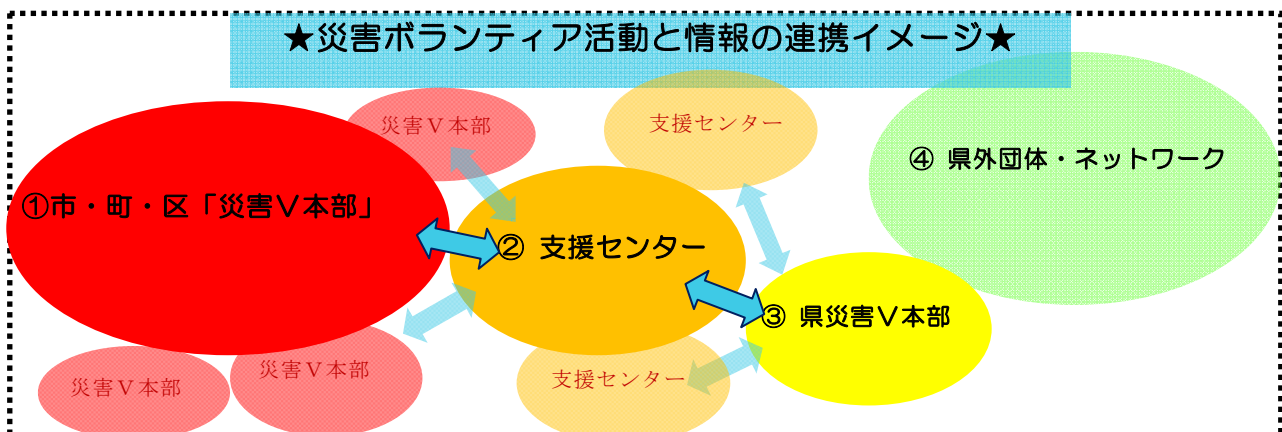


図. 災害ボランティア活動と情報の連携イメージ

（第5回静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練資料より抜粋）

2. 広域ボランティアセンターの役割として考えられる事項の例

平成20年度第2回防災ボランティア活動検討会（第9回）

分科会「広域連携」 意見交換より抜粋

◆各市町村災害ボランティアセンターの資金・資機材等について

- ・資金執行の促進（管理は行わない）
- ・活用できる資金に関する情報提供
- ・資金の運用方法に関する情報提供

◆各市町村災害ボランティアセンターの側面支援

- ・各市町村災害ボランティアセンターの立上げ支援
- ・各市町村災害ボランティアセンターの相談窓口
- ・十分に機能していない災害ボランティアセンターの支援（抱き起こし）
- ・各市町村災害ボランティアセンターの運営課題の共有と解決策の模索
- ・各市町村災害ボランティアセンター間の運営スタッフ・ボランティアの調整
- ・各市町村災害ボランティアセンターのボランティア活動人数の把握

◆情報発信・情報管理

- ・各市町村災害ボランティアセンターの開設状況とその変化に関する情報収集
- ・被災都道府県の関係者・ボランティア活動希望者への情報提供
- ・分野別の情報収集・情報交換・連携の支援（例えば、被災地障がい者支援センター）

◆問合せ窓口・広域での調整

- ・全国各地からのボランティア活動に関する問い合わせを受ける
- ・被災地内に入る人を止める、バランスをとる

3. 三遠南信災害ボランティア交流学習会について

(20100318 防災ボランティア活動検討会分科会資料/RSY 栗田作成)

【三遠南信とは？】

三遠南信（さんえんなんしん）または三遠信（さんえんしん）とは、東海地方・甲信地方の一角で、豊橋市を中心とする愛知県の東三河地方、政令市の浜松市を中心とする静岡県の遠州地方（西遠、中遠）、飯田市を中心とする長野県；信州；信濃の南部（南信州；飯伊地域）の飯田市および下伊那郡の県境をまたいだ地域の呼称。

【ボランティア学習交流会の開催目的】

東海・東南海地震などへの警戒が高まる中、この巨大地震が、東は神奈川から西は宮崎にかけて太平洋側の日本を震度 6 以上の揺れをもたらし、さらに 3m を超える津波の襲来も随所で予測されている。しかし、その対応は行政区により様々であり、ましてや他県と共同して対策を行うことは地域防災計画上も見ることができない。しかしボランティアに県境はないはずである。三河・遠州・南信州の地域は「三遠南信」という独自の共同体を構築しているため、来るべき巨大地震に対しても、この共同体を生かした備えや地震発生時の助け合いが実現できるのではないかと考えた。また、狭義の三遠南信、広義の愛知（名古屋）・静岡・長野という枠組みの中での「顔の見える関係」の構築を図ることを意図した。

【これまでの学習交流会など】

- ① 2007 年 6 月 30 日／豊橋市民センター（震災がつなぐ全国ネットワーク移動寺子屋として）
豊橋技術科学大学・倉本洋准教授（耐震工学）の基調講演、日本財団公益・ボランティア支援グループ長・黒澤司氏の基調報告、参加者全員による「東海・東南海地震を想定した図上訓練」を開催。参加者 89 名。
- ② 2008 年 7 月 5 日／浜松まちづくりセンター（浜松市社協主催、浜松まちづくりセンター共催）
日頃の活動紹介として、「豊橋防災ボランティアコーディネーターの会」「豊川防災ボランティアコーディネーターの会」「飯田市ボランティア協会」「サイボコ浜松」からの報告と意見交換、栗田による講評、その後、湖西市災害ボランティアの進行で、参加者全員でクロスロードを実施。参加者 118 名。
- ③ 2009 年 8 月 22 日／浜松まちづくりセンター（内閣府・浜松市防災フェアの一環として）
「浜松アレルギーの会」「静岡県浜松視覚特別支援学校」「ぴあクリニック」より、災害時要援護者の課題や対策の事例発表、その後、レスキューストックヤード浦野による「災害時要援護者の支援方法を考える」をテーマにグループワークを実施。参加者 73 名。
- ④ 2010 年 9 月 11 日に豊川で開催予定。

【その他】

- 平常時の情報交換等を活性化するため、メーリングリストを作成した。
- 全体での交流のみならず、飯田の事業に豊川が関わるなど、個別の交流も自由に進んでいる。
- あまり堅苦しいつながりにならないよう、また交流が義務とならないよう、緩やかな関係づくり、仲間作りをめざす。

震災がつなぐ全国ネットワーク移動寺子屋 三遠南信ネットワーク交流勉強会 〔報告書〕



〔日時〕 2007年6月30日（土）13:00～17:00

〔場所〕 豊橋市民センター（オレンジプラザ）6F研修室

〔主催〕 震災がつなぐ全国ネットワーク

【本事業は日本財団の支援を得て実施しました】

3. 三遠南信ネットワーク交流勉強会報告書

[目的]

東海・東南海地震などへの警戒が高まっています。この巨大地震は、東は神奈川から西は宮崎にかけて太平洋側の日本を震度 6 以上の揺れをもたらし、さらに 3m を超える津波の襲来も随所で予測されています。しかし、その対応は行政区により様々であり、ましてや他県と共同して対策を行うことは地域防災計画上も見ることはできません。一方で、三河・遠州・南信州の地域は「三遠南信」という独自の共同体を構築してきました。来るべき巨大地震に対して、この共同体を生かした備えや地震発生時の助け合いを実現するために、「顔の見える関係」の構築を通して、「もう一人のいのちを救えないか」という命題に挑む交流勉強会を開催します。

[内容]

時間	内容	担当
13:00～13:10	挨拶・ガイダンス	震つな代表・栗田暢之
13:10～14:10	基調講演 「東海・東南海地震に備えた地震防災対策」	豊橋技術科学大学 倉本洋准教授（耐震工学）
14:10～14:40	基調報告 「災害ボラセンには見えない支援活動」	日本財団公益・V支援G 黒澤司氏
14:40～15:00	休憩	
15:00～16:30	シミュレーション 「東海・東南海地震を想定した図上訓練」	震つな・静岡ボラ協
16:30～17:00	まとめ・意見交換	

[参加団体]

○愛知県

豊橋市防災ボランティアコーディネーターの会、豊橋市社会福祉協議会、豊川防災ボランティアコーディネーターの会、SeRV 中京、NPO 愛知ネット、豊田災害ボランティア会議、西尾災害ボランティア会議、愛知県防災局危機管理課、愛知県社会福祉協議会、災害時交通流監視システム研究会、災害ボランティアコーディネーターなごや、名古屋みどり災害ボランティアネットワーク、災害ボラネット守山、名古屋きた災害ボランティアネットワーク、名古屋市社会福祉協議会、名古屋市市民経済局地域振興課、あいち生活協同組合、レスキューストックヤード

○静岡県

アヴァンティ浜松、サイボコはままつ、Qポラちくおんき、浜松ボランティア連絡協議会、浜松市消防団、浜松市北区災害ボランティア、SeRV はままつ、都市防災研究所、浜松市社会福祉協議会本部、浜松市社会福祉協議会浜松地区センター、浜松市社会福祉協議会浜北地区センター、浜松市社会福祉協議会天竜地区センター、浜松市江東地区社協、浜松市中区東地区社協、浜松市可美地区社協、浜松市河輪地区社協、湖西市災害ボランティア、新居町災害ボランティア、御前崎災害支援ネットワーク、BRN かけがわ、静岡県社会福祉協議会、静岡県西部地域防災局、藤枝青年会議所、静岡県ボランティア協会

○長野県・その他

飯田ボランティア協会、ダイナックス都市環境研究所、ヒューマンシールド神戸、震災がつなぐ全国ネットワーク

●参加者合計：89名

3. 三遠南信ネットワーク交流勉強会報告書

1. 挨拶

主催者を代表して震災がつなぐ全国ネットワーク代表の栗田が挨拶をした。特に、会場の手配等の諸準備にご尽力いただいた豊橋市防災ボランティアコーディネーターの会に感謝申し上げます。

2. 基調講演

「東海・東南海地震に備えた地震防災対策」
豊橋技術科学大学・倉本洋准教授



【阪神淡路大震災における建築物被害】

- ・ 現基準で建てられたものも1F部分が崩れる、傾く
- ・ 基礎がしっかりしているもの
- ・ アフターショックで完全に倒れる
- ・ 増築した小学校→元の建物と増築部分の建築基準が異なる
- ・ 鉄骨構造→旧基準のものは簡単に崩れる。新基準であっても、溶接の問題で傾く
- ・ 木造は基本的に古いものから倒れる（屋根が重い・計算されていない…）
- ・ 1階が駐車場は特に弱かった
- ・ 3階建、ツーバイフォー、金融公庫からの融資を受けた建物は構造計算が必要だから丈夫だった
- ・ 1981年以前の建物はほぼ間違いなく壊れる

【東海地震・東南海地震はいつ来るのか】

- ・ わかりません
- ・ プレート境界で年4~6cm動く→4~6mで限界
- ・ 日本近郊で1日300回以上地震は起こっている。小さいか遠くで起こっているか
- ・ 100~150年間隔

- ・ 固着域はところどころ。浜松は確実にある。本当に被害が大きい。一番怖い
- ・ 宝永 1707.10.28.13時
- ・ 安政 12.23.9時東海・東南海、12.24.16時南海
- ・ もう20年東海地震がなかったら、連動だ
- ・ 昭和の地震は小さかった。次は歴史的にでかい。町が脆弱化している
- ・ プレートの内部で起こる=脳溢血みたいなもの
- ・ 東海地方では直下型地震も多く起こっている。予想ができない
- ・ 1979年中央防災会議による想定震源域。2001年想定震源域の見直し。2002年4月強化地域の見直し
- ・ 朝5時の被害5万棟、夕方6時25万棟…火災による被害の違い
- ・ 古い計算されていない建物が多すぎる…耐震化が必要
- ・ あと10年で耐震化90%…努力で被害が軽減できる
- ・ 耐震改修を今の3倍にしなれば、5年の前倒しができない
- ・ トヨタが被害にあうと日本経済全体に影響が出る
- ・ 東海地震は予知が可能だといわれている。地震観測網が随所に設置されている

【我が家の耐震診断】

- ・ 木造の在来工法かつ1981年以前の建物は必須
- ・ 地盤（以前どんな地域だったのか、地名からもわかる）と基礎（鉄筋の有無など）を調べる
- ・ 建物の形、壁の量、傷み具合（シロアリなど）などの総合評価
- ・ 家の中も重要、家具止め、その他アンテナ、プロパンなどもつないでおく
- ・ 非常持ち出し袋（水・食料など）
- ・ 耐震性能を把握
- ・ 周辺の地盤状況、究極の対策は引っ越す、売る。最低でも地震保険に加入
- ・ 「災害サイクル」減災→事前準備→災害→応急→復旧復興→減災…
- ・ Eディフェンス（三木市）での実験が続く

3. 三遠南信ネットワーク交流勉強会報告書

3. 基調報告

「災害ボランティアには見えない支援活動」

日本財団公益・ボランティア支援グループ長
黒澤司氏



【被災者のつづやきに耳を～VCの機能を再認識すること】

- ・ VC が立ち上がっても機能しない場合がある
- ・ 当たり前のことができない
- ・ 設置が目的になっていないか
- ・ 現実を見ているか
- ・ 地震と水害の違いの認識があるか
- ・ マッチングの難しさ
- ・ 課題を次につなげること
- ・ ボランティアの数とニーズの数は一致しない（土日にニーズがあるとは限らない）
- ・ ニーズの見つけ方のヒント（足湯隊、軽トラック隊、多機能サテライト・地域ごと）

【足湯隊のよさ】

- ・ ボランティアと会話が生まれる
- ・ 精神的癒しにつながる
- ・ 睡眠を促進する
- ・ 効果が現れやすい
- ・ 簡易な用具で安価
- ・ 手軽で短時間
- ・ 誰にでもできる

【軽トラック隊の役割】

- ・ ボランティアセンターの営業
- ・ 初めての災害。初めての被災者
- ・ 初めて見る災害ボランティア
- ・ ボランティアもボランティアセンターも遠い存在
- ・ 災害ボランティアを「見せる」必要

- ・ 物資・資機材を積んで、手伝いしながら、ゆっくりと被災地区を回る
- ・ ボランティアセンターとの連携（こんな地域で、こんな人たちなどの情報提供）
- ・ 瓦おろし、ブロック塀、家具の撤去などを軽トラックで巡回
- ・ サテライト（前線詰所）
- ・ ボランティアを近い存在に（区長・民生委員と一緒に）
- ・ 地域との顔の見える関係
- ・ 物資をストックして配布・貸し出し
- ・ 地域単位のお手伝い、できないことは VC にヘルプ・つなぐ
- ・ 被災者からの相談やアドバイスも（頼りになる存在）
- ・ 看板があればテントでも 1BOX 車でもいい。姿を見せる

【今後の課題など】

- ・ 赤紙対応をどうするか
- ・ 全壊は無理、被災者自身が危険だという建物にボランティアは依頼しないだろう
- ・ 重装備のボランティアが入れず、ねじりはちまきで長靴の被災者は入っている
- ・ 2007.7.14・旧山古志村・建設機械等を活用した災害ボランティア講習会開催
- ・ プログ「雨ニモ負マケズ風にも負ケズ」を見てください

4. シミュレーション「東海・東南海地震を想定した図上訓練」

豊橋地区（三河）・浜松地区（遠州）・飯田地区（南信）を主体に、その他静岡地区、名古屋地区に分かれ、B 全版の地図を机上にひろげ、以下の設定条件の下、課題 1～4 に取り組んだ。

■ 設定条件

- ・ 冬の朝 5 時。紀伊半島沖合いから駿河湾を震源域とする M8.4 の地震が発生。東海地震で想定していた予知は失敗。轟音とともに突然地面が激しく長く揺れ、夜明けとともにその甚大な被害の実態が明らかになりつつある。
- ・ 神奈川県西部から和歌山県沿岸部にかけて各地で震度 7 を記録したほか、警戒地域

3. 三遠南信ネットワーク交流勉強会報告書

とされていた多くの市町村が震度6弱以上の非常に激しい揺れを記録。火災が随所で発生し、また沿岸部は3m以上の津波が襲い、甚大な被害が出ている。

- ・ 人的被害や倒壊家屋も多数発生。
- ・ ライフライン（電気・水道・ガス）は、被災地全域でほぼ使用不可能。電気は被害の少なかった地域から徐々に回復しているらしい。一般電話は輻輳規制が残りほとんどが不通の状態。ただしインターネットは唯一使用可能。
- ・ 発災後1日が経過し、被害の実態が徐々に明らかになりつつある状態を想定。各地域と連絡を取る場合は「連絡表」を使用すること。

■ 課題1

あなたの地域の主要幹線、鉄道、主要施設等を確認のうえ、予想される被害状況を地図に書き込んでください。

- ・ 各地区ごとの一般道、高速道路、JR、名鉄、主要な幹線の橋、役所等の建物を確認し、家屋の倒壊、道路の寸断、孤立集落、火災、津波等の予測される被害を書き込んだ。

■ 課題2

あなたの地域（ボランティアグループ）が予定しているボランティアとしての行動計画（ボランティアセンターの設置概要等）を作成し、各地域の方に伝えてください。

- ・ 各地域のVCが設置された状況が各地域に伝達された。内容は、センター名、設置者・体制、場所、連絡先、アドレス等。

■ 課題3

あなたの地域だけでは対応できないと予想される事柄について連絡表を使って他地域と連携を図ってください。

- ・ 災害状況のためのバイクボランティア募集（三河→各VC）
- ・ 災害ボランティアコーディネーター求む（掛川VC→各VC）
- ・ VCの運営資金を送ってください（浜松中VC→日本財団）※回答「上層部と協議中」
- ・ 避難所対応のボランティアがほしい（豊橋

VC→名古屋VC）※回答「早速呼び掛ける」

- ・ 避難所対応のボランティアがほしい（豊橋VC→浜松VC）※回答「応援できません」
- ・ 浜松南側のルート壊滅が壊滅状態。長野県側からの進入の可否は？（浜松VC→飯田VC）
- ・ 孤立地域の高齢者の介護及び救助（豊橋VC→各VC）
- ・ ヘリポートの場所はあるか（飯田VC→掛川VC）※回答「掛川球場・掛川市民病院にあり」
- ・ その他、さまざまな応援依頼や状況把握のための連絡が飛び交った。



■ 課題4

浜松市在住のアトピー患者のホームページに「お風呂が入れなく深刻な影響が出始めている。助けてください。」との書き込みがありました。皆さんの地域ではどんな対応が可能でしょうか。

- ・ 豊橋VCから、東三河・飯田等の温泉地に温泉水の提供を要請し、運搬できる。
- ・ 飯田VCから、温泉水大量にあり。温泉用タンクローリーで運搬可能。
- ・ 名古屋VCから、もし移動可能なら、比較的被害の少ない名古屋での滞在を支援する。
- ・ 直接的な支援は無理だが、少しでも衛生に保つ方法や改善策等について、アトピーの会に照会し、連絡を入れる。

5. 閉会

白熱した一日の労を互いにねぎらい、今後も三遠南信のネットワーク強化につなげることを確認して閉会した。

（文責／栗田）

4. みえ災害ボランティア支援センター

ボランティア受け入れ計画策定の取組（予定）

（20100318 防災ボランティア活動検討会分科会資料／みえ防災市民会議山本作成）

【みえ災害ボランティア支援センターとは？】

三重県では災害発生時にボランティア活動を県域で支援するための環境整備を行うことを地域防災計画で明記しており、その具体的取組みとして、みえ防災市民会議、みえ NPO センター、三重県ボランティア連絡協議会、日本赤十字社三重県支部、三重県社会福祉協議会、三重県が協定を結んで平常時から幹事会議を開催し、県内外で災害が発生した時にはみえ災害ボランティア支援センターを協働設置してボランティア活動を支援する事としている。

【ボランティア受け入れ計画策定の取組(予定)とは？】

東海・東南海地震などの超広域災害発生時には、県民の自立支援をするために県域を超えて多くのボランティアの支援を受け入れる必要性に迫られることが想定されるが、どのような受け入れ体制を組めばボランティアの独自の領域や役割を活かしながら相互の協力体制・連携ができるのか、具体的な方針ができていない。

そこで、これまでに多くの広域支援を経験している NPO や各種団体(支援側)、市町の災害ボランティアセンターの設置主体(受援側)、みえ災害ボランティア支援センターの幹事団体(中間支援組織)、学識者等を交えた検討会を開催し、具体的にどのような受け入れ体制が望まれるのか、そのために県域の中間支援センターにできる役割とはなにか等について検討を行い、三重県地域防災計画に反映させていくことを目標とする。

【これからの予定など】

- ・ 年 4 回程度の検討会の開催を予定。

(内容予定)

1. 検討委員の顔合わせ、問題意識の共有
 2. 広域ボランティア活動を被災者の自立支援につなげるために必要な事項の洗い出し
 3. 県域の支援センターに果たせる役割の整理
 4. 三重県地域防災計画に反映すべき内容の精査
- ・ 検討会の資料として、今までに広域で支援活動をしてきた NPO 団体等にアンケートや聞き取り調査を実施予定。

【その他】

- 県域の支援センターで活動を統括・選択するという形ではなく、ボランティア（団体）や支援組織の自主性、独自性を損なわない支援のあり方、連携の呼びかけ方などを検討していきたいと考えている。
- 受け入れ体制の検討が一段落した段階で、県外の災害支援のための枠組づくりにもつなげていきたいと考えている。現状の県地域防災計画を根拠としたセンターでは、県内の災害への活動は明記できるが、県外災害の場合の根拠があいまいになっている。（すでに県外支援の実績はあるが、明確に根拠がある活動ではなく、自主的な活動に位置づけられている）